

おれが暗殺されない唯一の理由は
たぶんおれが鼻糞ほどのつまらぬ人間だからだ

C・ブコウスキー

私は神と同じだ
不死ではないと云うことを除けば

エウリピデス

二〇三〇年、七月二十二日、午前三時。

麻暮正作、玄治、竹田金之助は、〈ゲット作戦〉を開始している。
まだ明るい月が出ている。
美村麗子とお兼ばあさんも、念のために連れて来た。
まずは玄治が、海底都市に向かうはずの、川上宙門と木下太郎が乗る水上艇を狙う計画だった。
追手が来ることを想定して、金之助は観音崎の崖上に待機した。
麗子はお兼ばあさんの手を引いて、坂道を同行した。
麻暮は例によって、神出鬼没の役割。
特製アクアラングを身に付けた玄は、月光に照らされた観音崎の海岸から、水平線に向かって静かに泳いで行った。

時間が刻々と経過し、波も静かなので、もう今日は来ないのかと玄が思ったとき、紛れもなく水上艇の光線が遠くに見えた。
身体の大半を海に沈めたまま、その場に動かずにいると、水上艇の光線は次第次第に近づいて来る。
水上艇には、操縦ロボットの他、川上と木下しかいない。
灯台の灯りでそれを確認した玄治は、水上艇が減速するやいなや潜水して、ゆくりなく近づく。
躊躇せずに、玄は得意技を發揮した。
身体を瞬時に跳ね上げて、船を転覆させたのである。

そのときの玄は、凶暴な鮫に似ていた。

川上と木下は海面に投げ出され、両人が沈む前に、玄の肘打ちが二発繰り出された。

玄は、失神した川上と木下を引いて、海岸に向かって泳いだ。

必死で泳いだのは、操縦ロボットが追いかけてくるのを想定したからだが、想定外のことが起こった。

海底都市で働いていたロボット団が気づいて、海底から次々と、海坊主さながらに浮かびあがって来たのである。

玄を救ったのは、麻暮だった。

海岸から銚子を発射させ、玄がそれに掴まったのを見届けてから、電気ローラーを使って、銚子のロープを急速に海岸まで引いた。

海岸で麻暮と玄は、川上と木下をひとりずつ担ぐと、無人灯台へと向かった。

数え切れないほどのロボットが追う。

追って、坂を登る。

金之助の出番が来た。

観音崎の崖上から、ピンポン玉サイズの小型特製手榴弾を、次から次へと投擲する。

「ロボットに当たったときしか、破裂しないようセットしてありますから、コントロールは要らない。

めちゃくちゃに投げても大丈夫ですよ」

こんなに沢山の追っ手が来るとは思わなかった金之助が、麗子に助力を頼むと、麗子は言われた通りめちゃくちゃに投げ始めた。

わたしの従姉を元に戻せ、と胸の内で叫びながら。

お兼ばあさんまで、入れ歯が砕けるほど歯ぎしりしながら、投げ始めた。

それこそ盲目的に、右手で投げ、左手でも投げる二刀流だ。

観音崎で入水自殺をする寸前に、助けてくれて仕事までくれた、恩人の麻暮を助けねばならないと言う使命感で。

お兼ばあさんの投げた手榴弾は、崖を転がり、地上で軽く跳ねると、ロボットの手足に当たって、それでロボットは破裂する。

どう投げても当たるので、追っ手のロボットは片っ端から破裂する。

破裂しても音を立てない。

ただ何処にいたのか、鴉の群れが騒々しく飛び立って、暗い空をよけいに暗くする。

静かな月光の下で、ロボットは無音で粉微塵になる。

見た目ではまさしく、文字通り粉になる。

三人のピッチャーの活躍と、三百三十三個の手榴弾により、ロボット団は三分三十三秒で壊滅した。

無人灯台の上部は、あらかじめ麻暮によって改造されていた。

エレベーターやクレーン等が設置されていた。

川上と木下を上まで運んで、水をぶっかけて眼を覚まさせると、麻暮は玄に指示をした。

玄はふたりを素っ裸にひんむくと、まとめてロープで結び、クレーンのシャベルにぶちこむと、それを崖方面まで延ばした。

玄の操作ひとつで、あるいは小さな操作ミスのみで、百メートル下の岩石に激突するふたりは、恐怖の涙と小便が止まらない。

むかしから〈灯台もと暗し〉と云われるが、水平線に朝日の兆しが見え始めたいまは、眼下の岩石の鋭さ堅固さ巨きさが明白に見える。

川上と木下にとって、岩石は即ち恐怖の塊であった。けれども、ふたりを決して殺さぬよう、麻暮から云い含められている玄は、慎重すぎるほど慎重に操作している。

ふたりを殺してしまったら、認知症の特効薬も猪鹿蝶子の脳味噌も、手に入らない可能性があるし、うまく手に入ったあかつきには、ふたりの技術的ノウハウが必要だと踏んでいるからである。

小便を洩らした川上と木下は震える声で、

「命ばかりは」

「お助けを」

と口々に喚く。

玄は、意地悪く嘲笑って、

「以前お前たちを殺し損なったから、今度は失敗はしないぜ」

川上と木下は震える声で、

「何でもしますから」

「助けて下さい」

と口々に喚く。

玄は、もっと意地悪く嘲笑って、

「荒野を殺せって命じても、どうせやる勇氣もあるまいて」

川上と木下は震える声で、

「やります」

「やりますとも」

と口々に喚く。

そこへ麻暮がおもむろに声をかける。

「ケッケ。」

荒野を殺せなんて、頼まんよ。

なぜなら、荒野はボクの獲物だからね。

おそらく、おそらくだが、君たちは助かるにちがいない。

ほんの些細な情報を、口走るだけで。

そのことを、荒野も非難できないほどの、小さな事実を小さな声で」
震えが何とか収まった、川上と木下は、

「どんな情報でも」

「些細でなくても」

と口々に云う。

麻暮は断固たる口調で、

「三つ、たったの三つさ。」

こんな些細な情報を云えない奴は、生きる資格がないから、その場合はやむをえんな」

川上と木下は、

「生きる資格あります」

「もちろんあります」

と口々に云う。

「ならば」

麻暮は厳かに発する。

「一、猪鹿蝶子さんの脳味噌のありかは。」

二、認知症の特効薬のありかは。

三、荒野の次のターゲットは」

ふたりは躊躇う気配もない。

一は、川上が答える。

「未来計画カンパニー十三階の、メンテナンス室にあります」

二は、木下が答える。

「海底都市のセンタースクエア内の、特別検査室にあります」

三に就いては、川上と木下が顔を見合わせ、

「おそらく、竹田金之助さん」

と川上。

「いや、たぶん、美村麗子さん」

と木下。

「そのふたりは我らと共にいるから、当面ターゲットには成り得ない」

玄が叫ぶと、しばし間を置いてから、

「それなら、もしかすると、陽羅義光さんでしょうか」

と川上。

「荒野大人は福島に行くと言っていましたから、まちがいなくそうです」

と木下。

「そうか。」

しかし陽羅さんは、すでに惚け老人のはず」

麻暮がつぶやくと、川上は、

「それは自称であって、作家と云うものは本質的に嘘つきだと、荒野大人は云っておりました」

「君もそう思うのかね」

「思うも何も、作家のことなんか、知るはずありません。

ましてや無名の作家なんぞ、だれが相手にすると云うのでしょうか」

「ケケッ。

荒野が相手にしているではないか」

「気紛れでしょう」

「君は荒野の腹心のくせに、荒野のことを解っていないね」

川上が押し黙り、麻暮もそれ以上問わなかったのも、しばし沈黙が漂い、まだ弱い朝日が灯台を照らし始めた。

「玄さん、もうこのふたりに用はないから、落としてしまいなさい」

目配せしつつ、麻暮はあえて冷淡な声で伝えた。

「承知しました」

玄が答えて、わざとシャベルを揺らすと、川上と木下は脱糞しつつ再び失神した。

(荒野を裏切ってまで命を惜しむところを見ると、よっぽど奴らには可愛い家族がいるのだろう)

玄はそんなことを思って、憧憬と羨望と嫉妬を感じた。

その感情を押し殺し、再び水をぶっかけて、ふたりに残酷な現実に戻させた。

「生きているうちが花です。

再度、たった三つの質問をしますねん。

すみやかに答えて頂戴。

さすれば、君たちはいずれ家族の顔を見られるはずですよ。

ただし、本当に正直に答えてくれればですがねん。

ケケケ」

麻暮の厳かな声に、川上は声を震わせ、

「正直者が、正直に答えないわけがないではありませんか」

木下も声を震わせ、

「真実以外を話す捏造力は、持ち合わせてはおりません」

「ならば、聞こう。

一、海底都市で主に製造しているクスリは何か。

二、ロボットは退治した他に何体いるのか。

三、巨大コードの修復はどこまで進んでいるのか」

一も二も三も、川上が答える。

「海底都市では、主にサプリメントを製造しています。

健康に良いものと、美容に良いものと。

飲み続けると、早い人で一ヶ月、遅い人で半年で発狂します。

この時差は、原因を解らなくするための計算づくです。

ロボットは、さっきおそらく三百体以上やられたでしょうが、海底都市にはその十倍はおります。

ロボット製造所もありますから、ロボットのクローンならそれこそ幾らでも。
巨大コードとは、我々が言うところの〈原爆チューブ〉のことでしょうが、修理
専門ロボット隊によって、現在八割方修復されています。

以上でよろしいでしょうか。

家族の顔は見られるでしょうか」

麻暮はやはり厳かな声で、

「ケケケ。

ボクは、いずれと言いましたよねん。

そう、いずれです。

そのいずれが来るまでは、この灯台の地下の穴蔵に、裸のまんま居てもらいます
ね。

食糧もあるし空調も整った、快適な穴蔵ですよお。

鼠と土竜が出没しますが、齧られても鼻の先か亀頭ですから、命に別状はありま
せん」

二〇三〇年、七月二十二日、午前五時。

陽羅義光はいまだに、歌いながら踊り続けている。

あるいは、踊りながら歌い続けている。

素頓狂な節をつけて、頓珍漢な声で。

あるいは、頓珍漢な節をつけて、素頓狂な声で。

繰返し繰返し何度も何度も。

鮮やかだった血溜りは、完全に渴き、すでに赤黒く変色している。

ホラホラこれがわわしの血じゃ
ゲホゲホゲホと飛びだしたじゃ
ホイ命をけずる血のしぶきじゃ
ボロンボロンと死んでゆくじゃ
あいつもこいつも死にゆくじゃ
ダダダれが例外と云うのかじゃ
この世はぜんぜんかなわんじゃ
あの世にまったくかなわんじゃ
人生いろいろごくつまらんじゃ
ホイでもわしはかまわんのじゃ
ナンでもわしはかまわんのじゃ
つまらんもんはかまわんのじゃ
かまわんものはつまらんのじゃ

拘泥したれど無意味があるじゃ
感染したれど有意義がないじゃ
ケケケケツほどもあるないじゃ
プフイフイちもつあるないじゃ

すでに十時間ほど経っているはずだった。

荒野はその間、一度暗い便所に行き、二度夜の散歩をして来たが、あばら家の状況は変わることがなかった。

仄暗い外が、仄明るくなってきた。

蝉だか雀だかお化けだか、荒野にはよく解らない、やかましい声も聞こえ始めた。

荒野はさすがにうんざりして、

「陽羅さん、あなたはアル中ですか、それとも酒乱ですか」

出るかぎりの大声を放った。

ようやく歌も踊りもやめた陽羅は、荒野以上の大声で、

「阿房か。

アル中や酒乱になるのは、体力のある者にかぎられる。

なぜなら、アル中や酒乱になるほど酒を飲んだら、体力のない者は、アル中や酒乱になる前に死んでしまうからじゃ」

「なるほど。

けれども、あなたは強靱な体力の持ち主ではありませんか。

いつまで、歌い踊り続けるつもりなのでしょう。

私の忍耐力を試しているのでしょうか」

陽羅は手を叩くと、

「そうじゃ、こんなことしてられん。

わしは九十九の持病を持っておるのじゃった。

肺病、肝臓病、腎臓病、膵臓病、胃病、脳病、尿管結石、胆嚢結石、膀胱結石、腰椎ヘルニア、頸椎ヘルニア、大腸ヘルニア、心臓ヘルニア、心臓肥大、前立腺肥大、亀頭肥大、脳味噌肥大、高血圧症、高血脂症、高コレステロール症、無呼吸症、過呼吸症、梅毒、椿毒、桜毒、尿毒、糞毒、水虫、田虫、回虫、痔虫、腹声虫」

「もうけっこうです」

陽羅は急に動かなくなり、項垂れた。

いや、これ以上醜くできない醜い顔を、単に下に向けただけなのだ。

陽羅はつぶやく。

「一ダースの蟋蟀が交尾しておる。

捕まえて朝飯にしよう」

「秋でもないのに蟋蟀なんか。

それはゴキブリですよ」

「莫迦者。

此処には、死期はあっても、四季はないのじゃ」

「とにかく、何か私におっしゃりたいことがあれば、簡明に伝えてください。

それだけをお聞きして、もう私は帰りますから」

荒野が懇願口調で云うと、陽羅は傲慢口調で、

「荒野よ、荒野よ。

お前が何故に死を忌み嫌うのか、己自身で解らぬか。

余りにも巨大な能力を持って、この世に生れて来たからじゃ。

莫迦莫迦しい。

人生はそんなお前にとって、面白かろうが、それは総て幻想じゃ。

人生ほどつまらぬものはない。

人生はそれこそわしの存在と同じで、屑同然じゃよ。

価値も意味も、味噌も糞もあるもんか。

お前がいままで何故に、わしに危害を与えなかったか。

その理由は唯一、わしが屑同然だからじゃ。

荒野よ、荒野よ。

目覚めよ、目覚めよ。

生きる価値のない、生きる意味のない、人生に見切りをつけろ。

あるいは、わしと同様、金無し、夢無し、女無し、才無し、名無し、形無しの、六無斎として、死んだごとく生きるか」

「ぷふい」

と荒野は嘲笑った。

「あなたは、あなた。

私は、私。

それが人生ではないかしらん」

「くそったれめ。

己を覚れ。

一億光年の宇宙のなかで、芥子粒一個の荒野が何をほざくか」

「私は、生きる。

百年でも、千年でも。

私は、戦う。

百回でも、千回でも」

「お前は、神のつもりか。

存在するはずのない神の」

荒野は、これ以上美しくできない美しい顔を、天空に向けて

「天上天下、私独り、偉大だ。

私は、まさしく、巨人荒野。

不死の王者、永劫のD」

陽羅は不気味に笑って、

「もうよかろう。

もう済んだはずじゃ。

荒野の留守に、麻暮はやるべきことをやった」
「し、しまった」
荒野は凝然とした。
陽羅はまた不気味に笑ったが、荒野はその酷い醜さに、その酷い悪臭に、昨日の己、明日の己を見た。
荒野は身悶えた。
荒野は慟哭した。
荒野は立ち上がり、烈しく陽羅を蹴飛ばした。
小さく軽い陽羅は、五メートルばかり吹っ飛んで、大黒柱に脳天を打ちつけた。
醜い顔をさらに醜く引きつらせたままの状態、微動だにしなくなった。
臭い部屋にさらに臭い臭いが充満した。
荒野はあばら家を飛び出し、タクシーが拾える大通りに向かって、雑草のなかをいっさんに駆けた。
川上と木下を呼び出したが、通信不能だった。
荒野は鋭く舌打ちをし、憎々しげに唾を吐きながら、麻暮の鉄仮面を想い浮かべた。

二〇三〇年、七月二十二日、午前十時。

郷田狂介は自邸で、モーニングコーヒーを飲んでいる。
昨夜は眠れなかった。
荒野大三郎が襲って来るのを、怖れたわけではない。
それどころか、気持の半分では、待ち望んでいた。
猪鹿蝶子に変身した荒野を一目見てみたかったし、何よりも荒野が別館で養生していた期間が懐かしかった。
自分の人生のなかで、あれほど充実していたときはなかったとさえ思われた。
(あれは、あたしが荒野を介護していたのではなく、荒野を飼っていたのだ)
と考えると、武者震いすら覚えた。
郷田は、飲みかけのコーヒーを部屋にぶちまけた。
また退屈な日々が始まるのだと思うと、やりきれなかった。
大きな金にはなるが、もう離婚問題の解決や詳細な浮気調査なんかごめんだった。
観音崎へ駆け付けて、麻暮正作のブレーンの仲間入りをしようかと考えたが、時機を逸した感がある。
こんなまずいコーヒーではなく、とりあえず「帰路」のコーヒーを飲みたかったが、帰路は休店した。
立原正男どころか、山風健一も小林金助も、荒野にやられたとなつては、出かける先も話す相手もない。

岬奈々から電話でもかかってくれば、近況を聞きたいし、娘の美々社長の奮闘ぶりを聞いてもいい。

つと郷田は、壁に架けた三枚の写真に見入った。

以前解説したが、あれからだいぶ経っているので、再度簡単にやる。

三枚の写真は、右から順に、

〈舟木英介〉

〈麻暮正作〉

〈木場完蔵〉

である。

舟木探偵は、郷田が探偵稼業に入ったときの、

「日本探偵協会」

の会長であり、大先輩であり、恩人である。

郷田は本名は郷田京太郎なのだが、舟木英介の一字を勝手に貰って、郷田狂介と名のっているのだ。

(鉄仮面の写真である) 麻暮探偵は、いまは身近になってはいるが、かつてはあくまでも憧憬の対象である。

「世界一の探偵／探偵の神様」

だと考えている。

(現在行方不明の) 木場探偵は、盟友であり、

「探偵チャンピオン大会」

を争ったライバルでもある。

よく飲みよく語りよく喧嘩もしたが、あんないい奴はいなかったと思う。

三枚の原寸大の顔写真の上に、日本探偵協会の、

「探偵十訓」

の看板が掲げられている。

- 一、礼に始まり礼に終わる。
- 二、言葉や態度を乱さない。
- 三、例外のあることを忘れるな。
- 四、親といえども絶対秘密。
- 五、必勝は平素の鍛練から。
- 六、郷に入れば郷に従え。
- 七、探査には念を入れる。
- 八、服装は心まで。

九、直接調査を避ける。
十、よく咀嚼して結論を出す。]

郷田狂介は、朝の仕事始めに、この三枚の写真を眺め、探偵十訓を唱え、また夕の仕事納めに、同じことをするのを日課にしている。

今朝は唱えずに、ひたすら見つめる。

「例外のあることを忘れるな」

と、口に出して言う。

想えば、荒野大三郎の存在はまさに「例外」であって、その例外に翻弄された気がする。

「言葉や態度を乱さない」

と、口に出して言う。

言葉や態度をだいぶ乱してしまったが、それも荒野の所為だ。

「よく咀嚼して結論を出す」

と、口に出して言う。やはり初心に戻って、荒野の魂胆を見抜き、荒野の悪行を防がねばならないと決意した。

できれば荒野退治までやりたいが、それは探偵の神様がやることで、自分の役目ではないと思う。

そう決めつけねばならぬ自分の力の限界も、まったくもどかしいくらいだ。

郷田はスマホを操作して、竹田金之助のメールを見直した。

【すでに仲間三名に犠牲者が出ています／さすがの郷田さんでも危ない／こちらへやって来ませんか】

つぎに自分が送った返信を見直した。

【せっかくでありがたいけどさあ／あたしだってあれこれ心労で頭がパンクしそう／認知症にしてくれるならとっととやってもらいたいくらいよ】

ずいぶんと意固地な返信をしたものだ、と後悔をした。

郷田は外に出て、愛車が待っているガレージに向かった。

其処に荒野が待っていた。

荒野の美しい顔は荒み、眼の下に隈があった。

「とうとうやってきたわね」

郷田は観念して微笑した。

「命の恩人に対して、とても心苦しいのですが、郷田さんの能力は私にとって、大きな恐怖であり大きな障害なのです」

荒野は穏やかに云った。

「それは買い被りよ。

でもちょっと嬉しくはあるわね」
郷田も穏やかに云った。
「私はあなたを認知症にはしません。
これは私のささやかな恩返し。
でも、川上と木下が麻暮さんに捕らえられているので、仕方ありません。
しばらくの間、眠って戴きます」
荒野は立原などに使ったペンとは別のペンを郷田に向けた。
そのペンから放たれた細い光線を浴びただけで、郷田はその場に倒れ眠りに落ちた。
郷田の身体を、郷田の愛車の後部座席に運ぶと、荒野は運転席に坐った。
それから郷田のスマホのGPS機能で、麻暮の隠れ家の場所を確認した。
BMWは発進した。

二〇三〇年、七月二十二日、正午。

麻暮正作、玄治、竹田金之助は、隠れ家で昼食を採っている。
お兼ばあさんと美村麗子が、あれこれ調理して運んでくる。
烏賊飯、鮪の刺身、小鰹の空揚げ、鯖の味噌煮、鰹と鯖の粗汁、鮪の酢の物。
「旨い、旨い。
昼飯と云えば、ラーメンか牛丼ばかりだったからねえ」
玄は舌鼓を打ちながら、
「先生、次の手は」
と聞いた。
ほとんど箸をつけていないのに麻暮は、
「ボクらは旨い飯を食っていればいいのよ。
荒野はきっとやって来る。
荒野にとっては、ボクらの隠れ家も隠れ家には成り得ない。
ケッケ。
飛んで火に入る夏の虫にさせたいね」
「早く決着つけませんか、自分は旨い飯を食い過ぎて、動きが鈍くなりそうです」
金之助が笑いながら言うと、麗子も嬉しそうに笑った。
「本当にここにいると、お兼さんから料理も教えてもらえるし、掃除、洗濯と、花嫁修行になるわ」
「どこにお嫁に行くおつもりで」
玄が茶化すと、麗子は真面目くさって、
「この家にお嫁にすれば、一石二鳥かも」
麻暮が噎せると、玄治は居づらくなって、

「あの二人に烏賊飯を持ってってあげますね」

「ああ、冷蔵庫に天然水のペットボトルがあるから、それもね。
するめみたいになっちゃうと可哀相だから。

ケケケッ」

烏賊飯（甘辛く似たヤリ烏賊の胴に、烏賊の切身を交ぜて炊いた餅米を詰めたもの）二本と、冷たい麦茶のペットボトル二本を入れた手提げを持って、玄は外へ出て行った。

それから五分も経たずに、庭に車の停まる音が聴こえた。

「おいでなすったな」

と麻暮はつぶやき、麗子とお兼ばあさんに台所の隅に隠れているように伝えた。
麻暮と金之助が庭に出ると、BMWから荒野が降りた。

「ケケケ。

ずいぶんとお綺麗になって、羨ましい」

麻暮が声をかけると、荒野は美しく微笑んで、

「麻暮さんには、すこしもお変わりなく」

「変わりたいが、変わりようがない」

「ふふい。

早速ですが、用件を云ってもよろしいでしょうか」

「よろしいですよ」

荒野は軽く頭を下げてから、

「うちの川上と木下を、すみやかに返して戴きたい。

もちろん、タダとは云いません。

郷田さんプラス十億円で、交換と云うのはいかがでしょう」

飛んで火に入る夏の虫にさせたかった麻暮は、荒野の口から郷田の名前が出ると、

「よろしいですよ」

渋々答えた。

「金は要らないから、郷田さんだけ返してもらえばけっこう」

麻暮の指示で、金之助は玄治にメールを送った。

「相変わらず欲のないお人ですね。

それでは郷田さんをお返ししましょう」

荒野は、BMWの後部座席で眠っている郷田に、ペンの細い光線を与えた。

郷田はすぐに眼をさまし、麻暮の鉄仮面に気づくと、

「あらまあ先生、お元気そうで何よりですね」

と、呑気な声を出した。

自分に何があったのか、よく解っていない様子だった。

空腹に気づいた郷田が家のなかに入り、烏賊飯を頬張り始めると、玄治に背中を押されながら、川上と木下がやって来た。

素っ裸で、口に烏賊飯を銜えていた。

「何ですか。

レディーの前でその恰好は」

荒野は二人を叱咤し、車に乗るよう促した。

「愛車はしばらくお預かりしますと、郷田さんに伝えてください。

それでは麻暮さん、またお会いしましょう」

「会いたくはないが会わなきゃならんだろうよ。

ケケッ」

BMWはすみやかに発進した。

金之助から自分の失態を聞かされた郷田は、麻暮が部屋に入ってくると土下座をした。

「問題ありませんよ、郷田さん。

川上、木下の両君は、そろそろ解放しないとイケないと思っていました。

二人に舌でも噛み切られては、猪鹿蝶子さんを元に戻してもらうことが、できなくなっちゃいますからね」

麻暮の言葉に、郷田以上に麗子が反応して、感謝の涙を流した。

「ケッケ。

美村さん、それは感謝の涙と云うものですか。

感謝の涙は、ボクが猪鹿さんを、完全なまま取り戻してからにしてください。

いつまでも荒野に、美人になっていられたんでは、醜いボクの立場もありませんからねえ」

「はい」

麗子は泣き笑いの顔になった。

郷田は土下座の姿勢を崩さず、

「奪還作戦の最前線に、あたしを派遣してください」

「そのつもりですよ。

さすがの荒野も、命の恩人の郷田さんを認知症にはしなかった。

荒野、川上、木下に難なく近づけるのは、郷田さんしかおりません」

麻暮は麗子を見て、

「美村さんは郷田さんと組んで、未来計画カンパニー十三階のメンテナンス室を探ってください。

玄さんと金之助さんは、海底都市のセンタースクエア内の特別検査室をお願いします」

「麻暮先生はどこへ」

玄が聞いた。

「福島よ」

「福島と云うことは、まさか」

「陽羅義光さんの処ですよ」

「変人で変質的で惚け老人の処へなんぞ、どうして」

玄の問いに、麻暮は困ったふうに首を振り振り、
「じつは、あらゆる噂話を総合してみると、陽羅義光さんはもしかすると、我が生涯の師匠、禿光山人先生かもしれないんですよ」

「し、し、し、師匠。

し、し、し、失礼をしました」

「いや、まずはお会いしてみないと」

ここで金之助が驚愕の面持ちで、

「先生の先生とは。

自分らは麻暮先生こそ、探偵の神様と思っていましたが」

「ケッケ。

どんな世界にも、上には上がいるもの。

尤も、禿光山人先生は、探偵の師である以前に、人生の師なのです」

「それなら自分も、連れてっててもらえませんか」

「金之助さんには、先ほど伝えた使命があります」

「しかし、鉄仮面で行くと云うのは、いかにも、その、あの」

金之助のうろたえぶりに、麻暮は苦笑して、

「お兼さんと、ハイヤーで行きますから、大丈夫ですよ」

「しかし、陽羅さんは、年齢に関係なくひどい女嫌いとか」

「もし陽羅さんが禿光山人師匠だとしたなら、女嫌いである以上に、障害者に対する慈愛精神が高いので、問題はありません」

「しかし、しかし」

「金之助さんは、しかしばかりですね。

同じ〈しか〉なら、猪鹿さんのことを考えてあげてください」

金之助が首肯すると、こんどは麗子が、

「わたしも連れてって。

眼が不自由な演技をしますから」

「ありがたい申し出ですが、あそこはまだ、放射能の数値が半端ではなく、若い女性には連れては行けません」

麻暮といっときも離れたくない麗子が、がくんと項垂れると、台所からお兼ばあさんが声をかける。

「先生、連れて行ってあげたらどないかのう。

麗子さんは、ハイヤーの中で待っていてもらえば、問題なかよ」

郷田が援護し、

「それがいいわ。

わるいけどさ、未来計画カンパニー十三階のメンテナンス室を探るのは、あたし一人のほうがやりやすいし」

「郷田さんがそう云うなら、そうしましょうか。

お兼さんも、美村さんが一緒のほうが、心強いでしょうからねえ」

麻暮の決断に、麗子は狂喜した。

「さあ、昼間じゃけんど、乾杯じゃ、乾杯じゃ」
お兼ばあさんが焼酎の用意をした。

二〇三〇年、七月二十二日、午後三時。

郷田狂介は、鵜沼の自邸に向かっている。
荒野に愛車を持っていかれたので、タクシーを拾った。
郷田は車内で、思案を巡らせていた。

できれば、玄治と竹田金之助が海底都市に潜入する予定の、明日正午に同時に探索したい。

そのためには、未来計画カンパニーの内部に詳しい協力者がほしい。

岬美々はどうか。

(美々ちゃんなら、あたしに借りがあるはずだから、拒めないでしょうよ)

だが現在の、社長と云う立場を尊重してあげたかった。

ならば、秘書。

郷田は、以前〈未来計画カンパニー・再生パーティー〉に招かれたとき、秘書と懇意になっている。

だが秘書と云うものは、基本的に秘匿義務がある。

それを尊重してあげたかった。

つぎに郷田は、ロボットのタナカのことを考えた。

(そうだ、彼が最適だわ。

おっと、彼じゃなく、彼女だったわね)

自邸に着いて、ガレージを見ると、愛車BMWが戻っていた。

車内に郷田のスマホもあった。

金之助からメールが来ていた。

【もし助っ人が必要ならタナカ君が最適でしょう／親父さんの名前を出せば必ず協力してくれるはず】

一時間ばかり前のメールなので、荒野に見られている可能性がある。

苦笑しながらお礼の返信をした郷田は、

「一人でやるしかないわね」

とつぶやくと、シャワーを浴びるために部屋に入って行った。

二〇三〇年、七月二十二日、午後八時。

麻暮正作と美村麗子とお兼ばあさんが乗ったハイヤーが、福島陽羅義光のあばら家に近づいている。

麻暮は無人タクシーにするつもりだったが、麗子が怖がったのでベテラン運転手付きのハイヤーにしたのだ。

お兼ばあさんは運転手の隣、仮眠用のシートを纏っている。

目も見えて元気だった少女時代に、東北地方を転々としていたお兼ばあさんは、いまは何も見えないはずなのに、

「いま福島県に入ったぞい」

「いま磐梯山と信夫山の真ん中を走っているのう」

「陽羅さんの家まであと五キロじゃ」

と麻暮に報告している。

麻暮と麗子は後部座席だ。

麻暮は運転手を驚かせまいと、鉄仮面の上から頭巾をかぶっている。

はじめはお兼ばあさんが後部座席の予定だったが、麗子は交渉して替わった。

だから麗子は、ずっと麻暮にひっついていられた。

麻暮も女嫌いで通っているが、陽羅義光ほどではない。

それに麗子にはどことなく、自分の妹の面影があって、車中で麻暮は妹のことを思い出したりしていた。

あばら家まで約一キロの地点で、麻暮はハイヤーを止めさせた。

そこに運転手と麗子を待たせて、頭巾を取った麻暮はお兼ばあさんの手を引いて、お兼ばあさんの歩調に合わせ、雑草だらけの道なき空道を静かに歩いて行った。

名の知れぬ草たちが、麻暮の五体に遠慮なく纏わりつき、すぐに未練気に離れて行く。

内緒で麗子は覚束ない足取りで付いて行った。

月光が明るかったので、懐中電灯は必要なかった。

すぐにあばら家が遠く見えると、麻暮はそれがどんなものなのか、お兼ばあさんに説明しながら歩いて行った。

お兼ばあさんはしきりに頷いて、

「それはそれは、働きがいのありそうなお家じゃのう」

と笑顔でつぶやいた。

あばら家の部屋の中が見えるところまで来ると、

「あらま、死体の臭いがするがじゃ」

死体なのか、大黒柱の傍に襤褸の固まりが。

麗子は慌ててハイヤーに戻り、素早く麻暮は駆け寄るが、起き上がったから襤褸の固まりでも死体でもなかった。

「寝た、寝た、こんなに寝るのは、何年ぶりか」

これでもかと云うほどの醜い容姿が、明るい月光に照らされ、麻暮の目の前に露出した。

「先生、やっぱり禿光山人先生」

思わず麻暮は、涙声で叫んでいた。

「おう、麻暮か。

なんじゃ、その鉄仮面は」

陽羅は、いや、麻暮が禿光山人と呼んでいるのだから、これからはそう呼ぼう。

禿光山人はぶっきらぼうな声を、醜く崩れた顔のどこかに零した。

「これは、先生に作って戴いたものでして」

麻暮は腰を屈めて云った。

「そんなことは解っておる。

鉄仮面をいつまで被っておるつもりじゃ」

「それは先生が、これを顔にせいと」

「先生と云うでない、先生と云われるほど莫迦ではない。

おまえは禿光山人莫迦と、わしのことを呼んでいるんだぞ」

「失礼しました、師匠」

「わしは、とりあえず傷が癒えるまで、と云ったのじゃ」

「傷は癒えてはおりません。

すくなくとも心の傷は」

「嘘つけ。

嘘つきはわしの専売特許よ。

そんなことより、おまえに、精神の不死を伝授したのはわしじゃ。

よいか、心なぞと、ヤワなものの名を呼ぶな。

人間に在るのは、肉体と精神、それのみよ。

よいか、麻暮。

おまえは理解力がないから、何度でも云うが、愛とか心とか、そういうものは人間が作り出した便宜に過ぎぬ。

便宜、すなわち便器でな」

このままでは、禿光山人の御託が長く続くことを解っている麻暮は、話を変えようと、

「師匠には相変わらずご壮健で、嬉しく思われます」

「阿房か。

わしが不死身なのは、麻暮がいちばん解っておるじゃろ。

そんな世辞を云うヒマがあったら、此処に来たわけを云え」

「もしかして、荒野にやられているのではと、心配しまして」

麻暮は正直に答えた。

「阿房の二乗じゃ。

わしが荒野にやられるタマか、麻暮が知らぬはずはなかるう。

嘘つきじゃから、やられたふりはするがの。

他にわけがあるじゃろ、云うてみい」

「じつは、あそこに居るお兼さんですが、ご覧の通り眼が不自由で身寄りもないものですから、此処に置いてもらえないかと」

麻暮は不正直に答えた。

師匠が日々の生活に苦勞をしているに違いないので、事前にお兼ばあさんと交渉したのだ。

禿光山人は、部屋の端にうずくまっているお兼ばあさんを一瞥した。

「こんな処でよけりゃ居るがいい。

ただわしは女好きじゃから、貞操の保証はせんがね」

「まあ、ご冗談を。

いずれにしても、ありがとうございます」

お兼ばあさんは益々小さくなって、お辞儀をした。

麻暮が電灯をつけようとする、禿光山人は手で制し、

「麻暮は、錯視と云う言葉を知っておるかね」

「策士なら、師匠のことでしょう」

「阿房か。

わしみたいな正直者をつかまえて。

錯視と云うのはな、明るい処に居る人間が暗く見える。

暗い処に居る人間は明るく見える。

お兼さんに少しでも、明るい人間に見てもらいたい」

これは師匠のお兼さんに対する気遣いだと考え、相変わらず慈愛の深い人だと麻暮は懐かしい思いがした。

麻暮は禿光山人に助けてもらった過去の事件の数々を想い浮かべながら、

「師匠、もうひとつ他にわけがあります」

もし陽羅義光が禿光山人であったなら、そして師匠が荒野にやられていなければ、ぜひ聞いてみたいと、麻暮が車内で思ったことがあった。

「なんじゃ。

いや、聞かずともよい。

そんなこと知らんで、師匠とは云えぬ」

麻暮は口を噤み、禿光山人の言葉を待った。

禿光山人は、どこに付いているか解らぬ眼で宙を睨み、

「麻暮よ、

かつてわしは、『平家物語』を読んで聞かせたことがあったろう。

驕れる者は久しからず。

荒野はまさしく驕れる者じゃ。

いずれ自ら破滅する者を、退治しても仕方あるまいて。

そうよな、麻暮は、荒野による人類滅亡を危惧しておったな。

荒野ごときに滅亡される人類ならば、滅亡してもよい。

荒野の驕りは、人類の驕りを象徴するものでもあるからの。

人類がどうなっても、心配は要らぬ。
また新たな宇宙生命体が生れて来る。
人類なんて、そう立派なものではない。
立派だったら、戦争なんかやるもんか。
人間なんて、つまらぬ生き物よ。
どれほどの成功を遂げても、死んだらすぐに忘れ去られ、虫けらとさほどの差異もない。

人類の生命は、宇宙の生命の、大河の一滴に過ぎぬ。

ましてや人間個人の生命なぞ」

「だが師匠、禿光山人師匠」

かつて口答えをしたことがない師匠に、麻暮は鉄仮面を震わせて口答えをしようとした。

「麻暮よ。

云いたいことは解る。

麻暮とそのブレーンの生き甲斐は、何よりも荒野退治であるからの。

わしはお前たちの、生き甲斐まで奪うつもりはない。

わしは邪魔をせんが、できれば、化物退治と云う発想は捨て、荒野が自ら破滅するのを促進させることじゃ」

「だが師匠、禿光山人師匠」

「無意味な疑問はよすのじゃ。

いいか、麻暮。

わしのこの肉体を見よ。

このぐちゃぐちゃを視るのじゃ。

この肉の塊に、どんな意味があると云うのか。

わしの魂に、どんな意味があると云うのか。

荒野の悪意に、どんな意味があると云うのか。

麻暮の正義に、どんな意味があると云うのか。

その無意味の意味を知らずして、荒野を退治する資格はない」

禿光山人の禅問答風の言葉は、麻暮にはよく解らなかつたが、自分のために云っているはずの、師匠の強烈な言葉の圧力に圧された。

「解りました、師匠。

その線で、やれるだけのことはやってみます」

「解ればええ。

解ったなら、さっさと帰れ。

若いお嬢さんを待たせてはいかんぞ」

「ごぞんじでしたか」

「知らいでか。

麻暮を襲う者の気配は、一万キロ離れておっても察知できるぞ」

「ボクを襲うですと」

麻暮の戸惑いに禿光山人は、どこが口か解らぬ口で笑い、
「まあええ、そのうち解る。
ともかくわしは、麻暮に会えて言葉にできぬくらい嬉しかった。
もう思い残すことがないほどにな」
「ボクもです、師匠。
不死身の師匠には云う必要もないでしょうが、どうかいつまでもお元気で」
麻暮は涙ぐむと、お兼ばあさんに目配せして、あばら家を後にした。

ハイヤーに戻ってみると、美村麗子はお兼ばあさんが置いていった仮眠用のシーツを纏って後部座席に居たが、運転手の姿が見えなかった。

麻暮が尋ねると、麗子は微妙な表情をして、
「おトイレです」
と嘘を云った。

麗子に云い含められ金を貰って、運転手はハイヤーをしばし離れているのだ。
「そうか、それならしばらく待つとしようか」

麻暮が麗子の隣に乗り込むやいなや、仮眠用シーツを跳ね上げた麗子が襲って来た。

全裸だった。

月光に揺れる麗子の若い肌に、麻暮は目眩を起こしそうだった。

麗子の力は、何かに取り憑かれたほどに物凄く、麻暮に馬乗りになると、麻暮のマントの下のをすべて破り取った。

「君、君」

と麻暮は叫んだ。

「やめなさい」

「先生、先生」

と麗子は叫んだ。

「やめません」

麻暮は抵抗しつつ、

「君は一体」

「一体」

麗子は繰り返した。

「何を」

「何を」

「望んでいるんですか」

麗子は力を緩めず、

「先生の子供が」

「こ、子供」

「ほしいの」

「こんなボク」

抵抗しつつも麻暮は、戸惑わずにいられない。

「どうしても」

麗子の声は強い。

「どうして」

「運命なの」

「何が」

「世界中どこを探しても、この人しかいないと」

「君、かいかぶりは、やめなさい」

「やめません」

「まあ、待ちなさい」

「待てません」

「待ちなさい」

「二十歳まで待ったのです」

「やめなさい、待ちなさい」

麻暮はすでに、哀願の声。

はじめて麗子は、声の調子を変えて、

「お蝶さんと違って、ブスでごめんなさい」

麻暮はつい、

「そんなことはない、きれいだよ」

「だったら、ください」

「何、何」

「先生のスピリッツを」

「何ですと」

「先生のエキスを」

「何ですと」

「先生のスペルマを」

麗子の上下の口は液体に塗れ、上の口は鉄仮面を下の口は睾丸をしとど濡らした。

麗子自身、こんな軀になったことに内心驚愕し、且つ感動していた。

麻暮は抵抗をやめた。

これ以上抵抗し続けたら、麗子の肉体も精神も大きく傷つけると感じたのだ。

そう感じたとき、何十年ぶりかで屹立した。

麗子は麻暮の突出部に一気に沈腰、共に揺曳、疼痛と随喜の叫びを上げた。

運転手が戻ってきたとき、麻暮は声もなく、消耗した身体を麗子にあずけ、

(愛とか心なんてものは、便器に過ぎない)

と頭のなかでつぶやいていた。

(愛しい人、わたしの麻暮正作様)

麗子は微笑みながら、鉄仮面を愛しげに撫でていた。

麗子は運転手に、仙台駅前の一流ホテルに行くよう指示をした。
ホテルの受付でまず二部屋を予約すると、ホテル内の焼肉屋の個室を取り、麻暮と運転手に最高級の牛タンを奢った。

二〇三〇年、七月二十三日、正午。

装備を固めた玄治と竹田金之助は、観音崎の沖の海底都市に向かっている。
目指すは、海底都市のセンタースクエア内の特別検査室。
探偵七つ道具を忍ばせた郷田狂介は、未来計画カンパニーに向かっている。
目指すは、未来計画カンパニー十三階のメンテナンス室。
麻暮の前で偉そうに云った手前、かなり緊張している。
一番高額のスーツを着て来たので、余計に緊張してしまう。
玄関を抜け、無人の受付の前に立つと、すぐに岬美々がやって来たので、郷田は思わず声をあげた。

「あら、社長自らお出迎えだなんて」

「郷田先生がいらっしゃったのを、玄関先のカメラで確認したものですから」

美々は満面の笑みである。

「そんなら、秘書さんでもよこしてくればいいのに」

「秘書はもうじき来ますが、郷田先生にご挨拶だけはさせて戴こうと思ひまして」

「ふーん。

もう美々ちゃんなんて呼べないわね」

「郷田先生になら、何と呼ばれても問題ありませんわ」

相変わらず美々は満面の笑みである。

郷田は、オカマでなければよかったと思いつつ、

「あたしも、先生と呼ばれるようになったのね。

要するに、莫迦と呼ばれる年齢になったわけね」

「何をおっしゃっているの」

美々の笑顔が消えたとき、秘書がやって来た。

「郷田さま、お久しぶりです。

今日はどんなご用件で」

秘書の顔を見つめるのみならず、その手まで握った郷田は、

「相変わらずイケメンねえ。

十三階のメンテナンス室とやらを、見学に来たのよ。

あたしもそろそろ、美容整形でもしようと思つて」

「相変わらず、強引ですねえ。

このビルにはそんな部屋はございません」

「相変わらず、断定的ねえ。

あたしの情報に、狂いがあるとでも云うつもりなの」
郷田が秘書の手をつねると、美々がとつぜん社長の顔になって、秘書に命令する。
「郷田先生に、十三階のお部屋を一つ一つ、ぜんぶ見てもらってね。
郷田先生は、ミスのない探偵なのよ。
なぜか荒野前社長に出くわす気がして、私は十階より上には行かないようにしているけど、郷田先生があると云うなら、きっとあるんだわ。
私は出かけるから、おまかせするけど、決して失礼がないように。
それと見学が終わったら、郷田先生に冷たい玉露と高級和菓子をお出しするように」
「了解です」
とだけ秘書は答えた。

エレベーターに乗るとき、秘書が聞く。
「私たちには厳しい社長が、どうして郷田さんにはあんなに優しいんでしょう」
郷田は苦笑して、
「あんたも単細胞ねえ。
自分の会社を調べまくる探偵を、社長が歓迎するわけないでしょ。
あれは優しいんじゃないでさ、優しくするしかないだけなの」
秘書は十三階を押して、
「どうして、そんなことをする必要があるんでしょう。
社長は郷田さんに、弱味でも握られているんでしょうか」
郷田は益々苦笑して、
「あんたって若いのに大ボケねえ。
〈未来計画カンパニー・再生パーティー〉ってやつでさ、新社長が挨拶したでしょ。
私がここに立っているのは、郷田先生のおかげだっさ」
「ああ、あれなら覚えていますよ。
万能の郷田さんが、社長のギックリ腰でも治してくれたのかと」
(このオトボケも、秘匿義務の一環だったりして。
まったく、莫迦なんだか利口なんだか、解りゃしない)
郷田はもう苦笑すらしないで、
「あんたってつくづく、まあいいわ。
十三階よ、案内しなさいな」

一部屋一部屋覗いて、一番奥の部屋を覗いたとき、
「この部屋、匂うわねえ」
郷田は鼻先を蠢かせた。
「いわゆる開かずの間ですが、怪しい部屋ではありません」
秘書は淡々と云った。
「そういう意味じゃないの。

女の匂いがするのよ。
さっきまで女がいたでしょう」
「そういうことは知っていても云えません。
とくに女性の場合はプライバシーを尊重しませんと」
「さすがに、逃げ口上が巧いわね」
郷田は鼻先から部屋に入って行き、
「しばらくこの部屋に居させてね。
秘書さんは先にロビーに戻って、冷たい玉露と高級和菓子の用意でもしていてね」
「了解しました」
秘書は素直に引き上げて行った。
秘書の姿が消えると、郷田は奥の壁に耳を当てた。
それから、探偵七つ道具の一つ、超音波眼鏡をかけた。
壁の向こうに、メンテナンス室らしき一画が見えた。
「ここね」
とつぶやいたとき、背中に足音が聴こえた。
「入ってもいいですか」
足音の主が云った。
郷田は振り返らずに、
「いいもわるいも、あんたの部屋でしょ」
「ふふい。
美々に内緒で、勝手に使ってるだけ」
「よくばれないわね」
郷田が振り返ると、荒野が美しく微笑んでいた。
「とっくにばれてますよ。
でも美々は賢いから、知らぬふりをしているんです」
「そういうの賢いって云うのかしら」
「賢くないわけはありません。
私の曾孫ですからね」
「悪魔の遺伝子。
あら、失礼なこと云っちゃったわね」
「郷田さんは、命の恩人だから、何を云っても構いません」
荒野はまだ美しく微笑んでいた。
「その命の恩人に、あんたは何をしてくれたのさ」
郷田は突慥食に云った。
荒野は寄ってくると、
「ふふい。
命の恩人だから、ちょっとだけ役に立って戴きました。
おかげさまで、川上も木下も無事に取り戻せました」
「あたしも役に立つ人間になったわけね。

悪魔の役に立つ人間に」
「何とでも云ってください。
ところで、郷田さん、何かご用でしょうか」
「とぼけるんじゃないわよ。
あたしはメンテナンス室に用があるのよ」
郷田の喧嘩口調はまだ収まらない。
「それならどうぞ」
荒野が手をたたくと、おもむろに壁が開き、壁の向こうの部屋があらわになった。
その部屋には、郷田が見たこともない銀色の機材が据えられていた。
歯科の治療室に似ていたし、MRIやCTの検査室にも似ていた。
「もういいわ」
確認するだけで充分だった。
と云うより、これ以上はどうにもならない。
「ぷふい。
美容整形するんでしたら、専門医を呼びますけど」
「それって皮肉かしらん。
あたしはこれ以上、なおしようがないでしょうよ。
じゃあ、荒野さん、首を洗って待っていてね」
捨て台詞を残し、郷田は早足で去った。
下のロビーで冷たい玉露と高級和菓子を満喫するのは、むろん忘れなかったが。

その頃、玄治と竹田金之助は、海底都市のセンタースクエア内の特別検査室にまんまと潜入している。
難関がいくつもあったが、さすがに金之助はどんな鍵でも開けることができた。
クスリのありかもすぐに解った。
赤いペンと黄色いペンと青いペンと桃色のペンが各々数十本あって、赤が認知症にさせるクスリ、黄が眠らせるクスリ、青が認知症を治し、亦眠りから覚醒させるクスリ、桃色のペンは一時的に眠らせるクスリと云うことも解る。
赤いペンは要らないが、ここに置いておくわけにもいかないから、警報が鳴るのも構わずガラスケースを壊して、まとめて用意した大袋に入れた。
警報を聞いて、川上宙門と木下太郎が登場したが、玄の顔を見ると竦んだ。
「やあ両君、飛んで水に入る魚かな。
折角お返ししたばかりだが、またご同行願いますよ」
玄の凄んだ声に、川上と木下は益々竦んだ。
二人のその竦んだ軀に、玄は黄色いペンを当てた。
クスリが細い光線となって、川上と木下の体内に浸透した。
二人は即座に眠りに落ちた。

二〇三〇年、七月二十三日、午後三時。

麻暮正作と美村麗子は観音崎の隠れ家に居る。

仙台をゆっくり立ってハイヤーで着いたのが三十分ほど前。

郷田狂介が来たのがついさっき。

郷田が麻暮に報告をしていると、玄治と竹田金之助が、眠っている川上宙門と木下太郎と大袋を背負って戻って来た。

「解放したばかりなのに、彼らも難儀だねえ。

ケケケ」

麻暮は満足そうに云った。

「目を覚まさせましょうか」

青ペンを手にして、玄が聞いた。

「いや、このまま未来計画カンパニーの、メンテナンス室に運んで、あっちで目を覚まさせようかね」

皆を見回して、麻暮は答えた。

「しかし、この二人に手術をさせるにしても、猪鹿さんの軀をゲットしないと、元の鞘へ収まらないわねえ」

郷田が思案気な表情で云うと、

「いい手がある。

ハイヤーの中で美村さんに聞いたんだが、猪鹿さんにはほとんどもないアレルギーがある。

荒野の脳味噌はそのことを知らないが、猪鹿さんの軀は烈しい反応を起こす。

可哀相だが、その手を使うしかないだろうよ。

ケッケ」

「あらま、それは奇抜な新手ね。

さすがは従妹さんだわ」

郷田が誉めると、麗子は赤面したが、それはいままでのうぶな乙女の赤面ではないことに、郷田は直感的に気づいた。

「それでは明日正午の決行としましょう。

麻暮先生、決行メンバーを撰んでください」

玄の言葉に、麻暮は即座に、

「全員集合」

と叫んだ。

一同拍手をした。

「その前に金之助さんにお願ひがあります。

これからバイクを飛ばして、この青ペンで、山風さん、立原さん、金助さん、を元に戻してもらえませんか」

「了解です」

「ついでに今夜は、親父さんの処で泊まればいい。
玄さんは一旦釣具屋に帰って戴いて、帰路で十一時に待ち合わせしましょう」
「では明日」
玄はすぐに出て行った。
「美村さんも着替えとかあるでしょうから。
玄さんに送ってもらうといい。
そうそう、超高級メロンを買うのをお忘れなく」
麗子は不満そうだったが、
「解りました。
明日を楽しみにしていますね」
「郷田さんはボクと一緒に、明日の作戦を練りましょう」
「あたしも麻暮先生に頼りにされるようになったのね」
郷田はご機嫌だった。
「ケケケ。
だって、いま来たばかりの人に帰ってもらうわけにもいきませんからねえ」
「なんだ、そういうことなのお」
「そういうことじゃないけど、そういうことにしておくんです。
ケッケ」

麻暮はそれから、床の間の掛軸にじっと眼をやってしばし動かなかった。

掛軸はかつて禿光山人から贈られたもので、宮本武蔵晩年の自省自戒の書、『独行道』
の七箇条を、禿光山人が改めて書にしたものだった。

- 一 わが事において後悔せず
- 二 身にたのしみをたくまず
- 三 自他ともにうらみかこつ心なし
- 四 いずれの道にも別れを悲しまず
- 五 恋慕の道思いよる心なし
- 六 私宅においてのぞむ心なし
- 七 身ひとつに美食を好まず

二〇三〇年、七月二十四日、午前十一時。

玄治と竹田金之助は、再開なった鎌倉小町通りの喫茶店「帰路」に居る。
すぐに美村麗子が、重いメロンを抱えてやって来た。 すっかり元に戻った立原

が出迎えた。

そのとき郷田が運転する、七人乗りワゴン車が着いた。

川上と木下が後部座席で眠っている。

麻暮が降りた。

麗子は一旦メロンを立原に持たせて、麻暮にハグをした。

「なにそれ、もしかしてそういうことなのん」

郷田が騒ぐと、麗子は平気な顔で、

「そういうことなのよん」

と云って、鉄仮面の頬にキスをした。

「麻暮先生ったら、昨夜添い寝してあげた、あたしの立場はどうなるのよん」

麻暮は郷田の冗談に取り合わず、

「さあ、このまま出発ですよ」

と玄と金之助に声をかけた。

車中で麻暮は金之助に声をかけた。

「親父さんは大丈夫でしたか」

「おかげさまで。

元気すぎてどうしようかと。

すぐに麻暮先生に会いたいから、観音崎までバイクで連れてっててくださいと」

「ボクも会いたいけどさ。

この仕事にケリがつかないとねえ」

「山風署長には、一応あれこれ報告はしておきましたが、自分らと行動を共にしたいと、こちらも説得するのに骨が折れました」

「山風さんはそろそろ定年でしょ。

定年前に、経歴にキズをつけちゃあいけないからね」

「そうなんです。

自分たちは、元々スネにキズ持つ身ですからねえ」

「あたしはキズなんかないわ。

なんなら、あたしのスネを確認してみてよ」

郷田がむくれた。

「すいません、ついつい自分と一緒にしてしましまして」

金之助は頭をかいた。

郷田は、メロンを抱えた助手席の麗子をちらと見て、

「あんたはもうキズものよね」

麗子は怒るところか快活に笑って、

「当たり前」

二〇三〇年、七月二十四日、正午。

郷田狂介は、未来計画カンパニーの十三階に居る。
開かずの間をノックすると、
「郷田さん、また来たのですね。
どうぞお入りください」
荒野の声がした。
郷田は遠慮なく入って行くと、
「荒野大人、先日は手土産も持たずに来てしまいましたからねえ。
それなのに美々社長に、冷たい玉露と高級和菓子を戴きましたから。
あなたの好物を、今日は持参しましたのよん。
超高級メロンです」
「請求書が付いていたりして」
「とんでもない、あたしの奢りよ」
云いながら郷田は、木箱からメロンを取り出すと、早くもテーブルの上でカットし始めた。
ナイフどころか、フォークもスプーンもプレートも用意していた。
荒野は怪訝そうな眼で眺めている。
郷田は八等分カットを終えると、自ら食べ始めた。
甘い香りが室内に漂い、荒野は喉を鳴らした。
「やっぱり、超高級メロンは美味しいわねえ」
郷田は次々にカットメロンを食べる。
「それって、手土産じゃなかったの」
荒野が口を尖らせると、
「一応さあ、毒味をしなきゃ失礼と思ってさあ」
云いながらまだまだ食べ続ける。
麻暮と昨夜考えた作戦通りに。
それでもまだ荒野は、5%くらいは怪しんでいた。
このままでは郷田が一玉分ぜんぶ食べてしまいそうなので、鼻息荒く荒野は、
「いただきまーす」
と云いざま、フォークもスプーンも使わずにかぶりついた。
アレルギーは急激に來た。
荒野は卒倒すると、口から泡を吹き出して悶絶した。
すかさず郷田は、金之助にメールを送った。
(おそらく荒野も利用しているにちがいない) ビルの非常用裏扉の鍵を金之助が難なく開けて、そこから全員が入り込んだ。

二〇三〇年、七月二十四日、午後一時。

一同、メンテナンス室に居る。
手術台には、まだ口から泡を吐き出している荒野大三郎、いや猪鹿蝶子の軀。
もう一つの手術台には、冷凍室から取り出した荒野の軀。
そして蝶子の脳味噌が取り出される。
それらの作業は手先の器用な竹田金之助が行なっている。
玄治は赤ペンを手にして、覚醒して白衣を着ている川上宙門と木下太郎を威している。
郷田狂介は見張り役で、美村麗子は看護婦的な仕事をしている。
麻暮正作の号令が下って、川上と木下はA I 搭載の手術ロボットを操作し始めた。

二〇三〇年、七月二十四日、午後三時。

猪鹿蝶子は、メンテナンス室の手術台の上に居る。
一時間前に手術が終わり蝶子の麻酔が醒めるのを、美村麗子が見守っている。
麻暮正作、竹田金之助、玄治はすでに、郷田狂介の運転する七人乗りワゴン車で、
観音崎の隠れ家に向かっている。
(黄金仮面を付けた) まだ麻酔の醒めない荒野大三郎と、そして川上宙門と木下太郎を拘束したまま。

蝶子が目覚めた。
「あら、麗子じゃない。
どうしたの」
いつもの蝶子である。
麗子は深く安堵の溜息をついたが、憎まれ口も忘れなかった。
「どうもこうもないわよ。
お蝶さんらしくないわ。
荒野に騙されて、駆使われて」
蝶子はしかしまだ荒野を信じていた。
「軀ではなく、使われたのは脳味噌でしょ。
それなら自ら進んで提供したの」
「そんなの嘘よ。
お蝶さんの軀を使って、悪いことやったのよ」
麗子が我慢できないのは、蝶子ともあろう人が荒野の云いなりになったことだった。
これまでのあらましを麗子が説明すると、蝶子はあまり驚いたふうは見せないで、

「それで、荒野さんは今どこにいるの」
まだ荒野を気遣っている様子の蝶子に、麗子は苛立つ気持を抑えて、
「麻暮さんたちに、隠れ家に連れていかれたわ。
両腕の川上も木下もね」
「まさか殺されるんじゃないよね」
「殺したいけど、まだ殺せないわ。
荒野の計画を阻止するまではね」
「計画って、どんな」
「詳しくは知らないけど、あの手この手で世界を破壊するんだってさ。
お蝶さんは『巨人荒野』を読んだんでしょ」
蝶子は苦笑して、
「云っとくけど、私はもう猪鹿蝶子ではなくて、荒野蝶子なんだよ」
「ゲゲゲ。
なによそれ」
「言葉通り。
結婚したんだから」
「それは口実なのよ。
結婚だなんて莫迦みたい。
バーチャルセックスしたわけでも、籍に入れたわけでもないでしょ」
「籍なんて柄じゃない。
私は荒野夫人として、荒野研究をする。
もちろん、悪い計画があるなら、それを阻止するのは、麻暮さんではなくて、私
なの」
「ゲゲゲ。
まったく」
麗子は舌打ちをした。
「あんたも苦勞が絶えないってこと。
でも、麗子の苦勞が、私の力」
「ゲゲゲ。
またそれか」
麗子は溜息をついた。
「だって本当なもの」
「『巨人荒野』の作者を見たわ。
遠くからだから、はっきりってわけじゃないけど」
「大法螺吹きにくそおやじでしょ。
だいたいノンフィクションノベルを継続するのなら、現在の主人公である私に接
触しないで、書けるわけがないもの。
それなのに福島あたりでくすぶっていたんじゃ、一行だって書けないはずさ」
「たしかにくそおやじ、どころか糞の塊だったわ。」

ところがその糞の塊はね、麻暮さんのお師匠さんなんですって。
お師匠さんに対する麻暮さんの心酔ぶりは、半端ではなかったわ。
だからこれからはともかく、糞の塊はいまのところ、わざわざお蝶さんに接触し
ないでも大丈夫みたいよ。

糞の塊が絶世の美人に接するなんて、常識的に無理があるってこと、解っていそ
うなのよ」

麗子はひとこと余計な嘘を云った。

居心地がわるくなった蝶子は、話題を変えて、
「そんなことより、麗子ったら、なんとなく口ぶりが麻暮さんに似て来ていないか
なあ」

「まさかあ。

麻暮さんはケケケ、わたしゲゲゲ」

「そう云うことじゃないんだよな。

結婚だなんて莫迦みたい、なんて云って、麻暮さんと結婚したんじゃないか」

「莫迦も莫迦ね。

歳の差、たぶん八十よ」

「歳の差なんか関係ないわ。

二十歳前に死んじゃった人間もいるし、百歳過ぎても生きている人間もいる」

こんどは麗子が居心地がわるくなって、

「まあ、荒野夫人がなんとかしてくれるなら、麻暮さんは命懸けで荒野退治をしな
いでも済むわけだから、けっこう毛だらけね」

「そのつもりさ。

まあ見てらっしゃい。

あんたの大好きな麻暮さんの、命懸けの生き甲斐を私が奪ってしまうかも」

麗子は癩に触って、

「お蝶さんったら、眼が吊り上がっているわよ。

まさか妊娠してるんじゃないでしょうね」

蝶子も負けずに、

「麗子の方も、いままでの純粹さが消えて、妙に艶っぽくなっちゃってるよ。

女は妊ると、そういう顔になるのさ」

ふたりして、思わずお腹を押さえた。

二〇三〇年、七月二十四日、午後五時。

麻暮正作は、観音崎の隠れ家に居る。

すでに眼を醒まさせた荒野大三郎と、川上宙門、木下太郎の三名を見張っている。

かたや、玄治、竹田金之助、郷田狂介の三名は、土間に座敷牢ふうの檻を作って

いる。

もうすぐ完成しそうだ。

荒野は優しく親しげに、麻暮に笑いかける。

「プフイ」

麻暮は苦々しく皮肉っぽい笑いで返す。

「ケケケ」

麻暮は、かつて禿光山人から贈られた、宮本武蔵晩年の自省自戒の言葉、『独行道』七箇条の掛軸を眺めながら、師の言葉を思い起こしている。

『いいか、麻暮。

わしのこの肉体を見よ。

このぐちゃぐちゃを視るのじゃ。

この肉の塊に、どんな意味があると云うのか。

わしの魂に、どんな意味があると云うのか。

荒野の悪意に、どんな意味があると云うのか。

麻暮の正義に、どんな意味があると云うのか。

その無意味の意味を知らずして、荒野を退治する資格はない』

麻暮はいまになって、師に返事ができそうだった。

(荒野の悪意はともかく、ボクの正義には、どんな意味もありません。

かつて、いまも。

これからのことは解らぬまでも。

コード内で荒野と共に過ごして以来、荒野を殺害する意志は消え失せています。

しかし荒野の計画だけは阻止したい。

それが荒野の悪意だからでも、ボクの正義の行使だからでもありません。

そんな莫迦莫迦しいことが、人間の力では決して出来ないと云うことを、荒野に解らせてあげたいのです)

荒野もほぼ同時に、思い起こしている。

『荒野よ、荒野よ。

人生ほどつまらぬものはない。

人生はそれこそわしの存在と同じで、屑同然じゃよ。

価値も意味も、味噌も糞もあるもんか。

お前がいままで何故に、わしに危害を与えなかったか。

その理由は唯一、わしが屑同然だからじゃ。

荒野よ、荒野よ。

目覚めよ、目覚めよ。

生きる価値のない、生きる意味のない、人生に見切りをつけろ』

荒野は頭のなかでつぶやく。

(つまらぬ人生、つまらぬ人間に、いまこそ決着をつけるのです。

そんな途方もないこと、私がやらないでだれがやると云うのですか。

私は六無齋ではありませんが、才能も財産も名声も、少なくとも自分のものとは考えておりません)

座敷牢ふうの檻が出来て、荒野、川上、木下はその中に入れられた。